

新刊
紹介

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

北垣宗治編

『新島襄の世界——永眠百年の時
点から』

(晃洋書房・発行一九九〇年十一月)
A5判・三三二頁 三、二〇〇円

北垣宗治先生の編纂された『新島襄の世界——永眠百年の時点から』は新島襄永眠百年を記念して刊行されたもので、主にここ十余年間に書かれた新島研究の現時点で最も高いレベルの論文十点を集めて世に問うことも目的とされている。

一人の人間の研究は総合的・立体的なアプローチが必要であるが、本書を通読してみると、新島への多角的アプローチに見事

成功しているといえる。鍋木路易氏の「安中藩制と新島家の人々」は新島を理解する上で重要な下級武士の概念と彼の家庭環境及び彼の属する安中藩を知る上で格好の論文である。伊藤彌彦氏の「新島襄の脱櫃」は新島の伝統的な「戦闘的国士型憂国者」像を批判し、新しく「勉学指向型青年」像を緻密に描き上げ、新島の密航を当時の窒息しそうな「櫃」社会から脱出したいという私的な動機が強くなった結果であると主張する点にユニークさがある。しかし国防の責を負う武士として、親を捨て、藩主の許可を得ず、幕府の禁制を犯しても密航を決断させる動機の一つに、「国家に一分の力」をつくさんとする公的な志があったことも否定しえないであろう。千代肇氏の「新島襄 日本脱出の背景」は長年函館市立博物館学芸員としての資料収集上の強みが十分発揮された論文である。北垣宗治氏の「新島襄とホランド」はアームスト・カレッジ時代のルームメイトから見た新島像をアメリカで発掘した手紙によって描いた貴重な論文である。島尾永康氏の「新島襄と自然科学」は自然科学史家である筆者の蘊蓄を

傾けた論文で、自然科学史から見た新島の評価が初めて正確になされたといえる。末光力作氏の「新島襄と植物」は自然科学者の一面として植物に強い関心を示した新島を描いて興味深い。オーテス・ケリー氏の「ラットランドと新島襄と同志社」は一九七四年十月、ラットランドでおこなわれたボードの年会で新島がおこなった演説を詳細に報ずる地元新聞を発見し、新島の演説を実証したことに価値がある。河野仁昭氏の「新島襄と徳富蘆花」は筆者の鋭い文学的センスで蘆花の心理と新島の苦悩を描いたものである。本井康博氏の「新島襄と加藤勝弥」は新潟伝道に力を入れていた新島と「新潟における同志社」を目ざす北越学館及び加藤勝弥校長の関係を詳細な資料を用いて描いている。川西進氏の「Teachers and Friends of Niijima Jō during His Early Years」は新島の青少年時代の師や友人を丹念に調査した英文の論文で貴重である。編者北垣先生は新潟で新しい大学を創設する責任者として極めて多忙な立場にありながら、十編の論文を編纂し、各々の引用文を『新島襄全集』と照合し、詳しい索引

をつけるなど、本書の刊行に示された情熱に感服する。それは新島に対する深い敬慕の念からであろうか。

新島研究の現在の到達点を示す本書を多くの方々には是非読んでいただきたいと思う。
井上勝也(大学文学部教授)

薬師川虹一・豊田恵美子編著

『マザー・グースと英詩の魅力』

(北星堂書房・発行一九九〇年七月)
B6判・二八三頁 二、〇〇〇円

この本は著者の序文にもあるように、「英語で詩を読もうとする人に、詩の楽しみの手引き」となるように書かれた英詩入門である。これまでも英詩の入門書は、数多く刊行されているが、薬師川、豊田両氏のように息の合ったふたりの著者によって、書かれたという例はない。しかもそのことだけでなく、この本にはいくつかの新しい試みがなされていて、これまでの入門書にない魅力をそなえている。

まず全体は第一部訳詩編、第二部解説と鑑賞篇、第三部原詩篇によって構成されているが、これはまぎれもなく著者の創意によるものである。従来の入門書といえは、

まず原詩、それに訳と、その詩の訳法や鑑賞が平凡に並んでいるというのが、一般常識であったのだが、著者は従来のパターンを破って、新しい形式を採用し、その目的は見事に達成されている。

したがって、この本はどこから読みはじめてもよいのである。ワーズワースのルーシー詩のひとつ、「不思議な心の騒ぎ」を読んで見る。詩の訳は、この詩にかぎらないが、日本語として美しく彫琢がなされていて、しかも正確であって、訳詩だけでも十分に鑑賞に耐える。さらにこの詩について興味を湧けば、次にワーズワースの短かいが、要を得た伝記を読み、さらにその詩の鑑賞の頁を繰ればよい。すると「見つめていた月がストーンと彼らの家の向こうに落ちた。：月は決してほとんと落ちないはずで：詩人には月は見えていなかったと言つてよい」というような、まるで語りかけるような口調だが、はつと鋭い指摘がある。この例を見ただけでも、この本がそこいらいつばいあるような、陳腐な入門書でないことは、明らかであろう。

この本におさめられている詩は、表題に

もあるように、マザーグースと、ほかにはブレイク、バーンズ、ワーズワース、コウリリッジ、バイロン、シェリー、キーツらロマン派詩人のほかに、デイキンソンとデラ・メアの代表的な詩がそえられている。それらの詩の選択は著者の学識と趣味の深さを示すものであつて、とくにマザーグースを最初に置いているのは、それがイギリス詩の土壌として欠かせないものだという著者の認識にもとづくもので、マザーグースとロマン派の詩との関連性も、具体的に言及されている。この視点だけでも、この本の存在理由は十分で、かつ新しい魅力となつている。

つねに座右に置いておきたくなる本は、昨今は決して多くない。このすぐれた楽しい本は、単に英語を学ぶ学生や教師だけでなく、文学に興味をもつ人びとの座右に置かれ、ぜひおおぜいの方がたに読まれてほしいと思う。
出口保夫(早稲田大学教授)

森 浩一著

『文字と都と駅——奈良時代から平安時代——図説日本の古代6』

(中央公論社・発行一九九〇年九月
B5判・一五八頁 三、一〇七月)

「考古学は歴史学の補助学ではなく確固とした方法論であり、その考古学で日本通史を書きあげるのが将来の希望である」と熱っぽく語って、私達に強い印象を与えた講義から二十数年。著者は着実にその目的を果している。また先に出版された『日本の古代』全一六巻(中央公論社)では、早くから「古代学」を提唱し、関連する学問分野との提携による総合的な研究を進めることを実践した著者の姿勢が随所に認められるが、本書はその続篇として出版した図版を多く含んだ全六巻からなる書きおろしシリーズの最終巻である。

奈良時代から平安時代初期のいわゆる律令時代の日本列島各地の文化が、中央政府から一元的に波及したのではなく、各地が都ともよべる文化の発進地でもあることを、各地に残る遺跡を訪ね、遺物や文献を通して述べている。

平成二年は奇しくも新しい天皇が即位後、はじめておこなう新嘗祭、すなわち大嘗祭のおこなわれた年であった。この大嘗祭に

用いる荒妙服のアサを栽培しているのは、徳島県の剣山のみもと美馬郡木屋平村三木というところで、ここは平安時代の「延喜式」に「荒妙の神服は阿波の忌部が織る」と規定されている地とも一致する。著者はこの地を訪ね、現在国民の関心事のひとつである大嘗祭を足がかりとして私達を歴史の世界へと誘ってくれる。そして古代祭祀のなかで重要な位置を占めていた忌部氏の動向に注目し、阿波、紀伊、上総などに分布する彼らの集団を文献、考古資料から追求し、大嘗祭のなかでの忌部氏の役割の重要性を明らかにしている。さらに律令時代に入って国司が中央から派遣されるようになるなかで、新国造が阿波、紀伊さらに安房にも置かれていることに注目し、大嘗祭のように十数年、あるいは数十年に一度の祭祀でのそれぞれの国の伝統的な役割りは国司では対応することができず、そういう国に古来からの伝統を保っていた在地の人々を中心にした新国造が置かれたのは、と考察されている。

ここでは五つの項目に分かれた目次のなかで、1、忌部氏と大嘗祭の内容について

てしかふれることはできなかったが、以下
2、文字が語る村と都の交流 3、常陸国と陸奥へのルート 4、蝦夷社会の富と文化 5、日本列島各地の「都」のそれぞれの中でも遺跡、発掘資料、文献、伝承をもとに日本の各地の古代を生き生きと蘇らせてくれた。

本書を通読して最も強く感じられることは、一般的にみられる一元的な歴史叙述、歴史研究の殻を打ち破った著者の、文章の行間から湧き出てくる爽快感であった。そして「いつの日にか、過去の人びとがそれぞれの生涯をおくった都ともいうべき漁村や山村、あるいは農村や都市での歴史を織りなして、日本の歴史が書けないだろうか」という最後の問いかけは、著者の二十数年の軌跡を歩む筆者にとつてさらなる勇気を与えることばとも感じられた。

前園実知雄(文学文学部嘱託講師)

玉井敬之著

『高畑之家』

(桜楓社・発行一九九〇年十月
B6判・二〇〇頁 三、〇九〇円)

装丁から内容まで、なかなかしゃれた本

である。日本文学関係や同志社の刊行物、それに同人誌などにだされた文章二十七篇と、趣味の域をこえた絵十九葉、篆刻十一が収められている。こういう本がだせる人は幸福だ、読み眺めながらぼくはそう思った。

玉井さん(著者のひそみにならった。「詩の読者」は、漱石研究において一家をなしておられる。収められた文章のあちこちに、漱石にかかわることが出てくるのは、当然のことだろう。漱石も絵をかいた。手許にある『漱石遺墨集』をひっぱりだして眺め、ついでに津田青楓(この人も書中にてくする)のひどく卒直な批評をよんで、楽しい思いをした。この本が、そんな道草をさせたのである。

書名にも、玉井さん自身の篆刻がつかわれている。「篆刻と私」を読めば、その打ち込みぶりがわかる。かねてぼくは、玉井さんを執念の人だと思っているのだが、その多芸の背後にある執念を、「篆刻と私」のなかに窺うことができるのである。どんなことがあっても自動車の運転免許状を取ろうと思っていた玉井さんは、「間違いないく壮

年ないし老年の暴走族になる」ことを「否定できなかった」。そうだろうな、とぼくの頬に微笑が浮かぶのをとめようがない。

所収の文章には、有名無名の多くの人のことがかかっている。なかで一番好きなのは、「一人の女性が日本を去った」が始まる、「無題」である。玉井さんは、帰国する女性からの二度の電話に、二度とも、自分から受話器をおいてしまう。見送つてもいかなかった。玉井さんは硬派だな、とぼくは思う。しかしそれも、もうそれ以上話し続けられない、直接駅頭で別れることのできない、やさしさのなせる業かもしれない。あの「天安門事件」をはさんでの、出会いと別れの美しい作品である。

もう、一つひとつに触れている余裕はなくなつた。「文学の勉強は、とりわけそのときの自己の感受性に深くかわつているよ」うだが、あるとき、「それから」を何気なく読みだして、私は自分の足許がじわじわと崩れていくような感じにとらわれた。「私のテーマ」、と玉井さんは書かれている。つまるところ、文学とは、ものを書くとは、その人の人格なり生き方なりとつながって

いるものなのだ。

太田進(大学商学部教授)

大谷 實著

『新版 刑法総論の重要問題』

(立花書房・発行一九九〇年六月
B6判・四七〇頁・三、一〇〇円)

本書は、「刑法総論の重要問題(上)(下)」(一九八六年)に大幅な改訂を加え、新版として一冊にまとめられたものである。旧版と同様に、設例を通じて刑法総論の基本的論点を掘り下げ、犯罪論全体に解説を加えるという手法が踏襲されている。

本書の叙述形式の特徴は、重要な箇所をゴシックで強調し、各論点について関連問題を付けるという工夫がなされていることである。この手法は、基本書の知識を整理しながら論点を浮き彫りにするものとして、読者にとってきわめて有益である。

内容の特徴としては、第一に、最近の判例・学説の動向をも取り上げ、詳細な検討を加えたうえで新たに自説を展開して、著者の基本書である「刑法講義総論第二版」(成文堂、一九八九年)を補えるように配慮されていることである。第二に、旧版での

大塚仁教授の所説に加えて、前田雅英教授の所説と対決し、それを批判的に検討していることである。これにより、従来の社会倫理主義と法益保護主義という根本主義の対立を、社会秩序維持の見地から総合し、法益保護の徹底を図るために社会倫理を考慮しようとする著者の立場がさらに明確になっていく。法益侵害説と主観的要素、過失の実行行為、構成要件の故意・過失、違法性の実質、社会相当性の概念、治療行為、被害者の同意、挑発防衛、自招危難等の違法性阻却事由、違法性の意識の可能性および期待可能性の判断基準等、本書で改められた点を含めて、著者の基本的立場から一貫した犯罪論の理解が可能となる。その他に、過失、共謀共同正犯、共犯と身分、共犯の離脱、罪数等についても新たな理論が展開されていることも注目されるところである。

以上のように、本書は、従来の学説を整理しなおし、必要かつ十分な論点を掘り下げ、さらに新たに自説を展開するものであり、重要なポイントを把握しやすいように工夫されており、益々充実したものとなつ

ている。刑法総論において整理すべき「重要問題」を明らかにするものとして、本書は、刑法を学ぶ者、特に従来の社会倫理主義あるいは法益保護主義からの一面的な犯罪理論のいずれにも疑問を感じている者にとって、必読の書物であり、基本書と併わせて利用すれば、一層有用である。

川越 修共編
松原久利(天学法学部嘱託講師)

『青い恐怖白い街——コレラ流行と近代ヨーロッパ』

(平凡社・発行一九九〇年六月
A5判・二九七頁 三、一〇〇円)

本書は、一九世紀にヨーロッパを席卷したコレラの「青い恐怖」に当時の人々がどのような対応をしたのかを探るなかで、近代社会システムの「作動・定置」のメカニズムを解説しようとした意欲的な試みである。五人の執筆者はいずれも、京都における「近代社会史研究会」を構成する気鋭の研究者であり、本書は、この研究会を母体にし、問題意識や研究課題を共有するメンバーの共同研究の成果である。

本文は四部構成となっている。「コレラの

世界史」と題した第一部(見市雅俊)では、インド、日本、中東、ヨーロッパについてのコレラ流行の実態とその同時代的連関の意味が検討されている。第二部「コレラをみる目」(高木勇夫、柿本昭人)では、「コレラの社会史」の方法と可能性が論じられている。第三部「コレラ・都市・近代社会」

(見市、高木、柿本、南直人)では、コレラの「青い恐怖」と、この対応のなから結果として誕生した「白い街」、すなわち、「漂白」された清潔で健康な都市空間、との連接関係の具体的諸相が明らかにされる。最後の部「日常生活のなかの〈近代〉都市」(川越修)では、コレラの社会史的研究と、

それと並行して進んだヨーロッパ社会の都市化過程の歴史的分析をつなぐ回路として、「清潔—健康—秩序」という近代社会システムを作動させる汎用言語—社会規範が別出され、それが大衆化—日常化する過程がこのシステムの定置であったと結論されている。

本書からは歴史的な事実関係を教えられるところも多いのではあるが、その真骨頂は、「社会史」の方法やその可能性を前面に

押し出したところにあると思われる。ここで主張される社会史は、従来の歴史学（政治史、経済史、文化史など）が見落としてきた事象の「落穂拾い」を目ざしているのではない。つまり、単なる「民衆史」や「地域史」や「生活史」などではない。ここでいわれる社会史の方向は、コレラ流行というひとつの「事件史」を通じて、近代社会システムを支える固有の論理（川越氏の言葉借りれば、「清潔—健康—秩序」という汎用言語—社会規範）を解説することなのである。換言すれば、ある一定の時間・空間における相互主観・共同主観的な「生活世界」の像を具体的なディスクリプションを通じて浮かび上がらせるひとつの方法論が提示されたといえる。

布留川正博（大学経済学部研究員）

瀧田輝己著

『監査構造論』

（千倉書房・発行一九九〇年九月）
（A5判・二五四頁 三、八〇〇円）

本書は、公認会計士によって行われる会計監査の構造を解き明かすため、斬新なアプローチに基づく論理の展開がなされ、学

問的先鋒を窺うことができる格調の高い学術書である。公認会計士は会社の財務諸表が一般に認められた会計原則に準拠して適正に作成されているか否かを判断し、責任ある監査意見を表明する。この公認会計士の監査行動について、会計における違反性と時間概念」に的を絞り、分析と総合の研究成果を監査構造論として体系的にまとめたものである。

本書はII部構成からなっている。第I部の「会計における違反性」は、「会計原則の解釈（大前提）↓事実認識（小前提）↓監査意見の表明（結論）」の三段論法のシエーマで捉えることができる。監査人による「会計原則の解釈」は社会統制への実践的参加行為であり、社会的要請にどれほど適合するかにより、その解釈の妥当性が判断される。「事実認識」は事実認定と合原則性の判断の二つからなり、前者は実在性の検証、後者は準拠性の検証の原型をなす。文章やことばがもつ虚構性に含まれる虚偽性を、許容されない虚偽性は不正、許容される虚偽性は擬制（意味論的擬制、構文論的擬制、語用論的擬制）として論を展開し

ている。

第II部の「監査人の違反性判断基準としての時間概念」は、「順序」つまり共時・通時の時間軸、「時間の流れ」つまり過去・現在・未来の時間区分、「時間の指向性」つまり過去指向・現在指向・未来指向の文化的時間概念に分け、それぞれの時間概念が違反性の判断にどのような関わりをもつかを明らかにしている。

このように、これまでの監査論研究とは相違した観点から、種々の方法論を駆使した新しい手法により、会計における時間に関する違反性の問題を取り上げ、研究者としては第一級の成果を世に問うている。本書は論述に飛躍はみられず、高度な内容を平易にかつ明瞭に説明しており、監査論研究には時宜をえた好著であり、貴重な先駆的研究書となりえるものである。著者は新進気鋭の会計研究者であるとともに公認会計士の資格もあり、理論と実践の両立を可能ならしめる日本でも数少ない会計学者のひとつである。優れて社会的、人間的な用具とみなされる監査について、監査構造論の深化のみならず、監査機能論、監査目的

論の統合的研究により、監査の一般理論の構築化を期待するものである。

友杉芳正(三重大学教授)

光澤滋朗著

『マーケティンング論の源流』

(千倉書房・発行一九九〇年九月)
A5判・二九一頁 三、八〇〇円)

本書はその題名に示されているように、マーケティンング論の源流を尋ねることを主題としている。

第一部ではマーケティンング論がいつ、いかにして登場するにいたったのか、その背景、根拠について研究している。一九世紀から二〇世紀初頭、アメリカ資本主義内において、工業を中心として、ビッグ・ビジネスが登場、既存産業である食品産業、精肉産業、製粉産業において、また新興産業である収穫機産業、マシン産業などにおいて、近代的販売方式としてのマーケティンングが採用されるにいたった。工業部面のみならず、商業部面においても、百貨店、チェーン・ストア、通信販売店などの革新的形態の巨大企業が登場し、全国市場の形成と相まって、これらの発展はまた、工業

化を一層促進した。従来わが国のマーケティンング研究やマーケティンング論史研究においては、工業並びに商業を対象とした研究にとどまっていたが、著者は農業部面においても農産物の流通革新が進んでいたことを重視し、農産物の流通革新の実態について分析しており、新鮮さを感じる。

第二部では、マーケティンング論が誰によって、どのように形成されたのか、「(1)マーケティンング現象の記述が体系的か部分的か、(2)その内容が総論的か各論的か」という二点に着目し、記述と体系的性、総論的内容を基準として生成期のマーケティンング論の研究者として、A・W・ショウ、R・S・パトラー、L・D・H・ウェルドの三者を取り上げてそれぞれの理論を生き生きと紹介するとともに分析することによって、この三者の理論には共通性と同時に差異性があることを解明している。ショウ、パトラーは個別製造企業の視点からマーケティンングを考察しているのに対して、ウェルドは農産物の流通を社会的視点から考察している。この差異が今日のマーケティンング研究のミクロ・マーケティンング論と

マクロ・マーケティンング論の源流となつて、いることを明らかにするとともに、マーケティンングは本来的には、より広いマクロ的性格をもつものであると、著者の積極的見解を提示している。

実務家、研究者、学生を問わずマーケティンングに関心があり、マーケティンングについて深く研究しようとする者にとつては、本書は必読書である。なお、著者はマーケティンングの歴史に関する第一線の研究者であり、別に『マーケティンング管理発展史』(同文館、一九八七年)の研究書があるので、並行して読まれることを勧めたい。

近藤文明(京都大学経済学部教授)

西口章雄・浜口恒夫編著

『新版 インド経済』

(世界思想社・発行一九九〇年十一月)
B6判・二六八頁 二、六〇〇円)

一九六〇年代から活発に行なわれてきた発展途上国の研究の中でも、インドについての分析は、研究者の数からいっても、出版された本や論文の数からいっても群を抜いており、したがってその研究のレベルも高い。本書もそうした高いレベルにあるも

のと位置づけられるが、特にインドの経済全体を扱ったものとしては比較的小冊子であるにもかかわらず、この国の経済発展の経過と現在の特徴を的確にとらえたものとして、また執筆者が四人であるにもかかわらず、全体の構成がうまく統一されたものとして、我々途上国を勉強している者にとつては得る所が多い本と認められている。

さてそうした高い評価が与えられている本書が今回改訂された。その理由としては、まず旧版の執筆後既に四年以上経過しており、新しい資料を追加して、最近のインドの経済動向を明らかにしようとしたことが指摘できよう。そのため随所で表が更新されている。

合わせて第二章においていくつかの項目が新たに立てられていることに見られるように、世界経済とのかかわりをもう少し強調することによって、インド経済の特殊な国民経済の形成過程を一層わかりやすくしようとしていることであろう。

更にもうひとつの重要な理由は、本書の当初の目的、すなわち「インド経済の構造的変動の全体像を政治経済学的に把握」す

るという目的に一層正面から取組もうとしたことであり、そのため旧版にはなかった第七章、「経済開発と『社会的公正』」が追加されていることであろう。そもそも本書は経済的視点からインドを明らかにすることにあるので、政治面での分析は必要に応じて解説すればこと足りるとすることもできるが、一般に途上国では経済の動きが政治に反映されるということだけでなく、民族、宗教、政治等の動きが逆に経済を規定することも多く、その点国民経済が確立し、政治的にも安定している先進国よりもそうした面の分析が重要とならざるをえない。

特にインドの場合では、独立後の経済発展政策により生みだされ、今やこの国の経済的特徴になったとされている「構造内再生産形態」の歪み、特にそこから生じた貧富の差が、その広大な国土に多数の民族、言語、宗教、カースト等をもつこの国の不均質性を一層強め、社会不安をひきおこしていることは、無視できない問題となっている。新版はこの点を「社会的公正」という形で取上げ、インドの経済政策がこれまどのように経済発展のみを目指したものだ

けでは十分でなく、社会正義の要素も考慮に入れなければならないことにメスを入れようとした。ただ限られた紙数のためであるが、民族やカーストと社会不安、社会政策の具体的なからみ合いの分析がもう少しあればというのが、私の個人的な読後感である。

山根 学(大学商学部教授)

西岡 一著

『ガン時代の食卓革命』

(芽ばえ社・発行一九九〇年八月)
B6判・二〇七頁 一、二、三六円)

かつて、食物と呼ばれていた頃は「農」が支えていた状態であったものが、食品と名前をかえてからは「工」が生み出す形となり、元来、本質的にはなじまない大量生産を追求する過程で加工食品が生まれ、食品添加物が不可欠のものとなり、その発ガン性の問題が急速に浮上して来た。「ガン時代の食卓革命」を読んでいると、これからの事はさておき、よくこの年までガンにならないで生きて来られた、と思うほどである。著者の手訓れた説得力のある論のすまめ方は素人にもわかりやすく、それだけに、ではどうすればよいのか、と一瞬不安にか

られてしまう。

だが、そこが「食卓革命」である。食卓の革命はまず、よくかむ事からはじまる。

著者の専門領域での唾液の研究は多岐にわたっているが、食生活に充分関心をもつて、ゆっくりと落ち着いてよくかんで食べればかなり発ガン性物質の毒性が緩和される事がわかって来る。かつて書いた事であるが、ひどい「偏食」や、神経的な「拒食」や、あわただしい「急食」や、ひとりぼっちの「孤食」ではどうして救われないのと言うまでもない。

教会付属の幼稚園の理事長をしていたころ、若い御母様がたによくこんな話をした。「オカサンヤスメ、ハハキトク、ホッホ」と言うのを御存じですか。これは子供たちの好きな食べ物のことで、オムレツ、カレー、サンドウィッチ、ヤキメシ、スパゲッティ、メグマヤキ、そして、ハムエッグ、ハンバーグ、ギョーザ、トースト、クリームと言う訳ですが、これを読みかえて見ると、御母さん（母性）は休みっぱなし、母親の義務は危篤状態になっています。では、最後のホッホは何かと言いますと、これはホカ

ホカ弁当の事なんですけれども、実は荒れた食卓を眺めて、自嘲の笑いでホッホ。

もちろん冗談であるが、気がついて見ると子供達の好きなものがみな柔らかいものばかりである事に気がつく。これでは、ゆっくりと落ちついて、よくかんで食べる、正しい、これからの食卓革命にはとうていなじまない事は明らかである。明日の社会をになう若い人々のためにも是非一読をすすめたい書物である。

宮井 敏（大学商学部教授）

同志社談叢

第九号

論文

新島襄の大学設立運動（二）……………河野仁昭

明治初期岩手県の同志社人に

関する新資料……………高橋光夫

高橋元一郎ノート……………室田保夫

—詩・社会事業・平和そして祈り—

徳富蘆花と「今治英学校」……………竹本千万吉

資料

同志社職員異動表……………

—明治二十五〜二十七年—

新島襄に関する文献ノート……………

（その七）……………

河野仁昭

—著者・筆者別—

（頒価一、〇〇〇円・送料二六〇円）

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話（〇七五）—二五一—三〇三七・八